

◎グラウンド・ゼロで千人が歓声 ビンラディン容疑者殺害

【朝日新聞、2011.05.02】米同時多発テロで崩壊したニューヨークの世界貿易センター跡地「グラウンド・ゼロ」には2日未明までに、ビンラディン容疑者殺害のニュースを知った市民ら千人近くが集まった。歓声を上げ電柱に登ったり、星条旗を振ったりした。

ヨキーナ・ジャマールさん（32）はニュースを見た瞬間、「これは、グラウンド・ゼロに行かなくちゃ」とハーレムの自宅からろうそくを持って駆けつけた。「9・11」の時は、ジョージア州にいたが、米国全土が攻撃されていると恐怖を抱いた。「長年、待ち望んでいた日が来た。米国のことを誇りに思う」

タクシー運転手のゲリー・セティーさんは「10年前、ここは泣いている人ばかりだったが、今日は笑顔ばかり。いいねえ」。自身は事件の前年にインドからニューヨークに来た。シーク教徒なのに、ひげ姿からイスラム教徒と誤解され、数々の差別を受けてきた。「これで、そんな日が終わることをのぞみたい」

一方で、複雑な気持ちを抱く人たちもいる。対岸のニュージャージー州から来たジャーニス・ティージェンさん（67）は「節目の日かもしれないが、決して息子は戻ってこない」と静かに訴えた。警察官だった息子のケニーさん（当時31）は非番だったが、崩落するビルに巻き込まれた。「正義は貫かれた。今日は祝っていい日。でも、兵隊さんは毎日死んでいるし、身の安全に不安を感じている人は少なくない」と訴えた。

軍服姿の陸軍のアンソニー・マーフレさん（20）は、握手攻めにあつた。「自分の国を誇りに思う。でも、この日のために必死に働きながら、この場に立ち会えなかった同僚がたくさんいる。一つ言えることは、米国は決してあきらめないし、世界で最強の国だということだ」。胸を張り、目に涙をためていた。

ニューヨークのブルームバーグ市長は「ニューヨーク市民はこの日のために10年近く待った。この日の知らせが、テロの遺族や関係者に安堵（あんど）をもたらし、大きな節目となることを願っている」とするコメントを出した。（ニューヨーク＝田中光）

<http://www.asahi.com/international/update/0502/TKY201105020360.html>

◎ビンラディン容疑者死亡、中東諸国の反応は

【CNN、2011.05.03】アルカイダ指導者オサマ・ビンラディン容疑者死亡の報を受け、アラブ諸国のメディアはこの報道一色になった。しかし各国とも指導部は控えめな反応に終始している。

サレハ大統領の退陣要求デモが続くイエメンでは、サレハ政権、反政府陣営とも同容疑者の死を歓迎した。同国のある政府関係者は匿名で、「真に歴史的瞬間」「われわれはこのニュ

ースを歓迎している。何百万もの人が今夜は安心して眠れるだろう」と話している。

パレスチナ自治政府のファイヤード首相は「非常に画期的な出来事」と評価。エジプト野党勢力のムスリム同胞団も支持を表明した。

しかし、その他の中東諸国では、指導者からの公式なコメントはほとんど出ていない。

アラブ首長国連邦（UAE）政府がアルカイダの影響力排除に力を入れるなど、中東各国はアルカイダ撲滅の動きにかかわってきた。半面、各国の指導者は国内にビンラディン容疑者を英雄視する層がいることも認識しており、同容疑者の死を歓迎しているとみなされれば報復攻撃を招きかねないと懸念する。報道機関もこのニュースの伝え方には細心の注意を払っている。

アフガニスタンのカルザイ大統領は、ビンラディン容疑者の死によって、アフガニスタンがテロの場ではないことを世界に納得してもらおう一助になるとの見方を示した。同国では長年の間、毎日のように民間人が殺害されてきたと指摘、「多国籍軍が真にアフガンの同盟国なら、今こそアフガニスタンの女性や子ども、老人たちを殺害するのは良いことではないと声を上げるべきだ」と訴えた。

<http://www.cnn.co.jp/world/30002635.html>

◎ビンラディン容疑者殺害 国際法上の問題、指摘する声も

【朝日新聞、2011.05.02】米国によるオサマ・ビンラディン容疑者の殺害は国際法上、認められるのか。戦場での軍事作戦としての殺害だったと考えれば、戦争行為の一環として認められる可能性がある。しかし、国家による個人を狙った「暗殺」と解釈することもでき、米国の行為には疑問の声もある。

米国にとっては、自国の主権が及ばないパキスタンでの殺害だが、パキスタン当局の協力の下で作戦を実行したと主張している。

しかし、標的が戦闘員にあたる人物で、戦争行為の一環として戦場で殺害されたと言えるのかは意見が分かれる。ベルギー・ルーバンカトリック大学のピエール・ダルジョン教授は、この点について「本来は生きて拘束されるべきだった。国際法上、認められる殺害だったかどうかは微妙だ」と語る。

オランダ・アムステルダム大学のジャン・ダスプレモン准教授も「米側の行動がすべて国際人道法上の手続きにのっとったものだったのかどうか、今後、検証が必要だ」と指摘する。

国連の旧ユーゴスラビア戦犯法廷で判事を務めた法政大学の多谷千香子教授は、明らかに問題があるとする。「米国にとって危険人物なら、誰でも殺して良いことになってしまう」

仮にビンラディン容疑者が拘束されたとしても、人道上の重大犯罪について個人を裁く国際刑事裁判所（ICC）での審理は難しかった。米国が、政治利用の懸念を理由にICC条約に加わっていないためだ。

米国はキューバ・グアンタナモ米軍基地に設けた特別軍事法廷で裁く選択肢もあったが、

同法廷自体をめぐって政治的に議論が分かれる中、そうした手続きも省略した。国際社会は「9・11」の黒幕から証言を得る機会を永久に失った。(ブリュッセル=野島淳)

<http://www.asahi.com/international/update/0502/TKY201105020489.html?ref=reca>

◎ 「非イスラム的」水葬に批判声明 スンニ派指導者

【日本経済新聞、2011.05.03】米政府が2日、国際テロ組織アルカイダの指導者ウサマ・ビンラディン容疑者の遺体を水葬したと発表したことについて、イスラム教スンニ派の最高権威機関アズハル（カイロ）の指導者タイプ師らイスラム法学者は「イスラムとは相いれない」と批判する声明を出した。欧州メディアが伝えた。

米側は同容疑者を葬る際は「イスラムの伝統的作法にのっとった」と主張しているが、タイプ師は「(死者の) 思想信条がどうあれ、遺体を損ねることは禁止。土葬によって死者に敬意を払うのだ」と述べた。

【キーワード】 9.11 同時多発テロ事件、テロとの戦い、ビンラディン、テロ組織、アルカイダ、国際法と暗殺